

世俗化論の背後にあるもの

——現代の宗教状況の把握のために——

大 塚 秀 見

はじめに

第二次世界大戦後の宗教状況は、先進国を中心として世俗化する傾向にあったということができよう。また世俗化傾向は現在も進行しつつあるということもできよう。世俗化 (secularization) 概念に関しては、さまざまな研究が試みられているが、いまだに定説というものはでていない⁽¹⁾。そもそも、現代の宗教状況をいいあらわす言葉としての世俗化は、刻々と変化する宗教状況に対しての説明概念である以上、つねに修正を余儀なくされるという宿命にあるといえる。

本論文では、世俗化という言葉をも、大まかに捉えて「宗教が果たしていた機能や求心力が、徐々に他の機構に代替されるか、目に見えないかたちをとるようになってきている状況」を指して用いることとする。しかし、世界的な宗教状況をみると、一九七〇年代以降、世俗化とは方向を異にするさまざまな現象が見えはじめてきている。それは、先進国においては宗教保守派の発言力が増大しているという状況、第三世界における解放の神学に代表されるような宗教勢力の台頭などである⁽²⁾。これらの事実を反証として、すぐに世俗化理論を攻撃し、その無効性

を論じることは、世俗化論が把握しようとする試みる、現代社会や現代の宗教に対するすべての側面への否定につながり、妥当ではない。さきに、「世俗化」については一応の定義をしたように、世俗化という観念を幅をもたせて解釈することによって、現代の宗教状況について考察していくことにする。

一、宗教へのアプローチ

宗教の実証的研究をおこなおうとする宗教学は、経験科学に属し、ある意味で宗教の価値評価に対して禁欲的でないならばならない。少なくとも日本における宗教学は、「宗教をもっぱら人間の生活現象という角度から観察し、経験的資料とその論理的操作とによって、公共的客観性をもった実証性理論を構築しようとする学問である。」⁽³⁾という考え方に、おおむね共通の理解をしており、前提として受け入れられているということができよう。

しかし、宗教という人間にかかわる、また人間を超えたものとかかわる、身近でいて、しかも単純に対象化しきれない対象を扱う宗教研究は、大きな難題をかかえている。そのことは、経験科学のなかでも、他の諸学問に比してもとくに顕著である。さらに、研究者個人が、なんらかのかたちで宗教とかかわっているという決定的事実がある。⁽⁴⁾まず、研究者は、信仰をもっているならば、その個人的信条にすくなくから影響をうけることを防ぐことはできない。また、無信仰を表明する研究者も「宗教を信じない」または「宗教に価値を見いださない」という宗教にたいする、一つの価値判断を避けようもなくおこなっていることになってしまおうというパラドックスに立っている。

宗教研究は、アプローチの仕方によって、いくつかの分野にわかれている。岸本英夫は、宗教研究を大きく四つにわけて、その学問的性格について規定している。それは、神学・宗教哲学・宗教史・狭義の宗教学という分類で

ある。そして、神学と宗教哲学を主観的な立場からの研究とし、宗教史と狭義の宗教学を客観的な立場の研究とする。宗教哲学については、「にんげんの理性を抛りどころにする宗教の研究とってよいであろう。自分の理性が納得しない限り、神学に対しても、批判を与えることを辞さない。しかし、その研究の目的とするところは、宗教の本質を明らかにし、自分にとってあるべき宗教を究めようとするところにある。その意味で、これも、主観的立場を離れない。」と述べている。⁽⁵⁾

次に、哲学の立場からの宗教研究の視座についてみていこう。『現代密教』第一号で那須政玄氏は、次のように論じている。

端的にいうならば宗教は「超越」という契機を重視するのに対して、哲学はむしろさしあたり「超越」に対して禁欲的になるのである。先に宗教へのアプローチの仕方に実証的・科学的な仕方と哲学的な仕方との二つがあるといった。前者は宗教を外在的に（つまり宗教を問うているその人自身を度外視して）「客観的对象」として考察するのに対して、後者は問う人自身が同時に問われる「対象」となるという内在的な考察である。そして筆者のさしあたりの印象としては、前者のようなアプローチの仕方では「ぬかに釘」というか「木に竹を継ぐ」というか、種々なる宗教現象の知識は増大するかもしれないが（そのかぎり後者のための素材の提供という点で意味はあるが）、そもそも魂といったことはほとんど触れえず（あるいは魂を自明のこととして暗黙のうち）に前提しているかぎり視野に入らず、したがってとも「魂の救済」はおぼつかないように思われるのである。⁽⁶⁾

ある意味において、この宗教学に対するきびしい批判は成り立っている。また、哲学からの宗教へのアプローチ

を強調したレトリックとしても理解ができる。しかし、宗教学自体は、批判を受けた点に関しては、すでに了解していることである。宗教学は、つねに禁欲的な態度を保ってきた。その理由は、宗教学の西欧での歴史を振り返ってみると明らかとなるであろう。西欧における宗教学の歴史は、その成立基盤を確保するのに、多大のエネルギーを消費してきた。そもそも、キリスト教の圧倒的に優位な社会で、宗教を相対化して研究する必然性が承認されていなかったのである。キリスト教が唯一絶対で、他の宗教は低級なものであるという大前提にたつ神学研究から、厳しい非難を受けてきたという歴史があるからである。これ以上、宗教学の歴史については触れないが、宗教学が主観的研究である神学から、距離を保つことに一番力をいれなければならなかった状況は理解できると思われる。

日本では、仏教が西欧における神学とは大きく異なり、排他的、教条主義的な性格を持っていなかったために、日本の宗教研究は、自由におこなわれてきたのである。それが逆に、研究対象を相対化すること、客観化することの難しさについて、共通の認識が育っていないというマイナス面があると言えるようである。つまり、宗教という研究対象を相対化することは自明のこととして理解されているようであり、実際はかえって根本的に相対化する作業に対しての了解があいまいであるように思われる。それ故、日本における宗教研究は、宗教学も含めて、研究の立場についてもう一度、問い直してみる必要があるであろう。

三、社会構造の変化の影響

現代の社会が、加速度的に早い展開を示していることに關しては、異存のないところであろう。世界史を翻って考えてみても、一〇年、二〇年の単位で、続けざまに産業構造の変化に伴う大きな社会変化が起こったような例は、過去にはほとんどみいだすことはできない。そして、特に注意しなければならないことは、第二次世界大戦後

の社会変化は、技術面が中心に進んでいるので、社会なり、個人なりが、新しい社会状況との直面ないし、対決を明確に意識することなくうけいれてしまっているという面が大きい。そのため、宗教は、その社会的性格と宗教の目指す真理への認識構造に少なからぬひずみが生じているといえるであろう。宗教教団は、伝統を重んじるゆえに、本質的に社会変化にすばやく対応するようにはできていない。多くの場合、外部的要因によって、宗教現象は変化している。このことに関して、ブライアン・ウィルソン (Bryan Wilson) は、つぎのように述べている。

伝統的宗教は、誕生、成長、結婚、死亡というライフ・サイクルの各段階に生じる欲求や不安に対応していた。しかし、こうした既成宗教は、激しい、過去と断絶した。前例のない社会変動には適応できない。このような急激な変動の原因のうち、もっとも多いのは、内容を異にする文化との接触が突発的に起こることである。一つの伝統的社会に、生活様式を全く異にする人々が侵入し、ことに侵入者が進んだ技術と知識をもつとき、この接触による衝撃が、大きな社会的、宗教的混乱を引き起こし、さらに新宗教運動の台頭に到る。⁽⁸⁾

ここで、ウィルソンは、新宗教運動の発生する過程を、既成宗教状況が社会変化に対応しきれないからであるとしている。しかし、この論は一面では妥当性をもっているものの、もちろんすべての現象について説明しきれないわけではない。例えば、社会変化によって、既成宗教がそれまでの形態をまったく維持できなかったわけではない。また、新宗教が、新しい社会に完全に対応しているという状況はほとんどその実例をみることはできない。

新宗教運動が意味する動きは、次の二点であろう。第一は、社会変化に対応しきれないでいる既成宗教を、内部からまたは外部から刺激を与え、活性化させる。第二は、社会変化に伴って生じた、以前の宗教体系ではカバーし

きれない部分に光をあてたということであろう。

三、いわゆる「世俗化」とは

世俗化論に関しては、さまざまな角度から研究されているにもかかわらず、なかなか一定の合意が得られていないのが現状である。特に、日本においては、西欧でおこった論争のように、研究者が現実には危機意識をもって、世俗化論に向かい合うようなことがほとんどなかったことが影響していよう。

ここでは、「世俗化論」そのものに焦点をあてるわけではないので、世俗化についての概観だけをしてみたい。まず、柳川啓一氏の分類にしたがってみていくことにする。「時代を問わず、たとえ古代においても、世俗化現象があり、それへの反発もあるという説と、近現代、とくに第二次大戦終結後、一九五〇年代のヨーロッパに発し、北アメリカ、さらに世界各地に及んで行く現象とみる説に分かれる。」⁽⁹⁾という。世俗化現象が、なにも現代にかぎったことではなく古代にもあったという考え方は、ある面で正しい分析であるとはいえよう。しかし、なぜいま、世俗化論が大きな問題として登場しているのかとは、程遠い議論のように思われる。しいていえば、世俗化論だけですべてを説明してしまおうという強引さに対する、一つの歯止めとはなるであろう。それゆえ、ここで考察の対象となる「世俗化」とは、柳川氏と同様に現代社会の問題に限定することにする。

柳川氏は、世俗化を三つに分類している。「(1) 非宗教化して行く傾向。(2) 宗教が、非宗教の文化、社会制度と分化する程度がいよいよ激しくなる。しかしこれは非宗教化ではなく、宗教の独自の領域が明瞭になって来るという見地。(3) 宗教の概念、あるいは存在様式が、大きく変動する時代にさしかかっているので、伝統的様式の宗教が衰えたように見えるが、宗教そのものは、ずっと存在しているという解釈。」⁽¹⁰⁾つまり、第一の考え方は、

ブライアン・ウィルソンに代表されるように、宗教の果たしていた機能が、他の機構に変わられつつあり、宗教は衰退するというみかたである。第二の考え方は、宗教が付加的に担ってきた諸要素が、他のものに移行するので、宗教本来のあり方が明確になるという意見である。第三は、伝統的様式の宗教が衰えただけで、宗教そのものは常に存在しているという考え方である。この考え方の代表は「見えない宗教」⁽¹⁾という用語で有名なトーマス・ルックマン(Thomas Luckmann)である。

また、宗教社会学における世俗化論を考える上で、マックス・ウェーバーとデュルケムの理論の基本構造について考慮しておく必要があるであろう。図式的に見るならば、ウェーバーの場合は、聖(宗教)から俗(他の社会機構)に移行するという認識構造が基本となっている。また、デュルケムの場合は、聖・俗(宗教)から他の社会機構(社会字)に移行するという大前提が存在している。要するに、宗教は消滅していくものであるという考え方がその根底にあるという、避けがたい限界がある。⁽²⁾

四、日本の社会と宗教状況

第二次大戦後に、世俗化ということばで表せる状況が急激に顕現した背後には、日本社会の大きな変化がある。まず、一番の大きな変化として、産業構造における就業人口構造の急速な推移を指摘することができるであろう。

一九三〇年には、第一次産業就業者が四九・四%、第二次産業就業者が二〇・四%第三次産業就業者が三〇・二%であった。戦後すぐの一九五〇年には、ほとんど変わらず、第一次が四八%、第二次が二一・九%、第三次が二九・八%であった。それが、一九六〇年には、第一次が三一・六%、第二次が二九・二%、第三次が三八・二%と産業構造に急激な変化が起こり始めた。そして、さらに勢いを早めた展開によって、一九七〇年には、第一次産業

就業者が一九・四%と一気に減少し、一九七五年には、一三・九%一九八〇年には一〇・九%、一九八五年には九・三%と大幅に減少したのである。¹³⁾ それにかわって、第三次産業就業者が急速に増加したのである。また、第二次産業就業者は、一九七五年の三四・一%をピークとして横バイから下降傾向にあると言えよう。

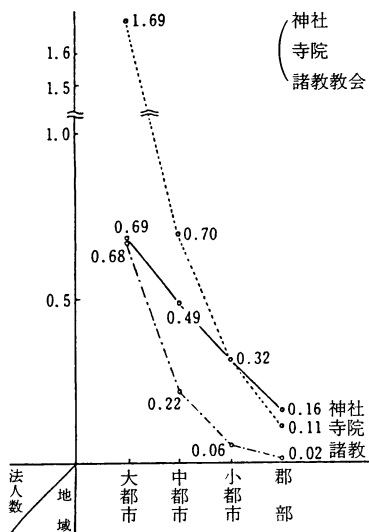
このような産業構造の変化は、社会変動を必然的にもたらすのである。第二次・第三次産業就業者の増加は、とりもなおさず、都市集中化を意味する。それに付随する形で、過密、過疎問題、さらに都市周辺部でのドーナツ化現象に伴うベッドタウン化がおこっている。そして、結果として生じる人口の大移動は、へ生み込まれた宗教¹⁴⁾を中心に成立している日本の宗教地図に大きな影響を与えていることは、まぎれもない事実である。また、ベッドタウンに新しく移り住む人々は、職場と生活の場が違い、地域とのつながりも薄くなる傾向にあるといえる。このことは、地域社会と密着した形で成立している日本の宗教、特に仏教や神道に少なからぬ打撃を与えることが予想される。

以上、見てきたように、産業構造の急激な変化の結果、既成宗教は、分化宗教（見えない宗教）やへ生み込まれた宗教¹⁴⁾としての存在形態では、現代の社会変動に対処しきれないという事態が生じているし、これからよりその現実が顕著になって現われてくることが予想される。

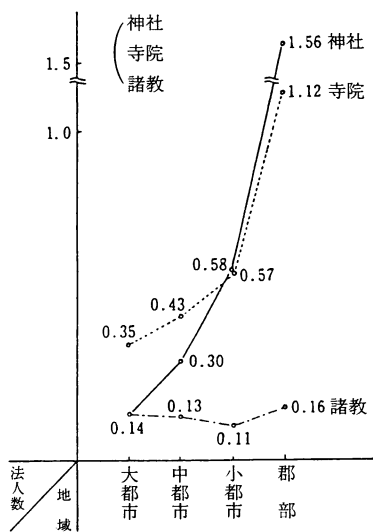
次に、文化庁が実施した昭和五十五〜五十六年にかけての宗教法人調査結果¹⁵⁾をもとに、神道および仏教が直面している危機について考えてみたい。図(A)および図(B)は、一平方キロメートルあたりの法人数をあらわしたグラフである。寺院と神社が、数量的には圧倒的に多いが、大都市、中都市、小都市、郡部での比率には、教派神道系教会やキリスト教系教会と同様の傾向を示している。しかし、図(C)と図(D)で示されている「人口千人あたりの法人数」では、神社や教派神道系教会とのあいだには、大きな違いが生じている。特に、神社と寺院は、

世俗化論の背後にあるもの

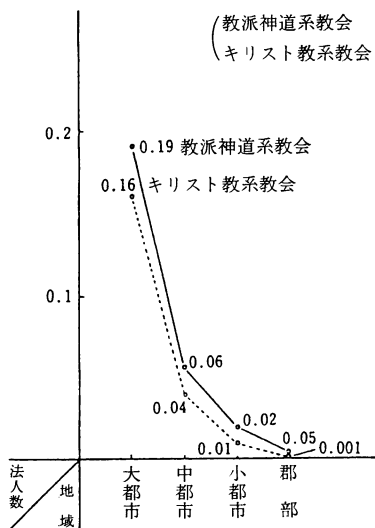
図(A) 1km当たりの法人数



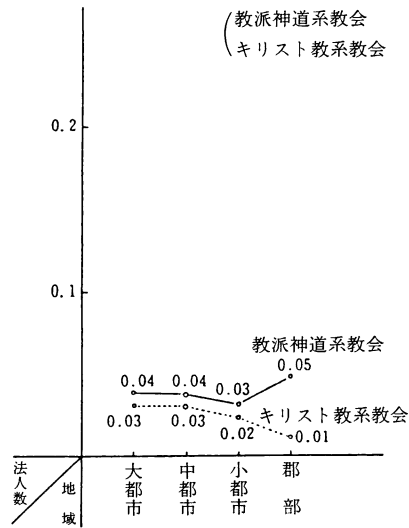
図(C) 人口1,000人当たりの法人数



図(B) 1km当たりの法人数



図(D) 人口1,000人当たりの法人数



昭和61年度版『宗教年鑑』より

人口密度が低くなるに郡部での数値が、極端に高くなっている。これらの原因は、明らかに社会変動による人口の移動によるものと考えられる。キリスト教や教派神道は、日本における布教・伝道が遅かったこと、および地域社会全体で信仰されている例が少ないことなどから、あまり影響を蒙らずに済んだということができよう。

また、近代化⁽¹⁶⁾と世俗化が、双子的性格のものであるとするなら、日本の宗教は近代化という名の世俗化の洗礼を受けているということが出来る。そして、とくに神道と仏教は、その波を直接的に受けているのである。日本の社会はもともと世俗性の社会であるから、西欧の世俗化理論は妥当しないという議論が、しばしばなされてきた。しかし、世俗化という言葉から感じ取っている宗教教団の危機意識は、さきに検討したように、産業構造の変化、人口の移動、地域社会との関係の希薄化というような近代化に対するものということが出来るであろう。近代化はまさに、日本の宗教地図を大きく塗りかえようとしているということが出来るかもしれない。

註

(1) 世俗化の意味を歴史的概観から、ヤン・スインゲドー氏は、四つに分類している。へ1 政治的・法律的な意味として、所有権を含めた権威が、教会から国家へ移行する過程をいう。へ2 転義的な意味として、へ1 での権威の移行の特に文化的側面をさす。へ3 歴史的カテゴリーとしての、社会的・文化的変動の過程をさす。へ4 神学的な意味として、キリスト教信仰の現世的性格と役割の強調をさす。

ヤン・スインゲドー「世俗化」『宗教学辞典』所収 東

京大学出版会一九七三年 四九六頁

(2) 田丸徳善「世俗化」概念の妥当性——日本の状況との関連から』『東洋学術研究』第二六巻一号所収 一九八七年 七九〜八〇頁

このなかで、世俗化の傾向と相違する例として、ハモンド(Hammond)の説を紹介しながら、次のように指摘している。「世界各地での多くの新宗教運動の発生、ヨーロッパならびにアメリカにおける保守的プロテスタントイズムの台頭、そして北アイルランド、レバノン、インド、パキスタン、ポーランド、ラテン・アメリカなどの諸地域における宗教の影響力の増大である。」

- (3) 脇本平也 「宗教の実証的研究」『岩波講座哲学第十五巻〈宗教と道徳〉』所収 一九七一年 七七頁
- (4) 拙論 「宗教研究における〈視座〉の問題——ファン・デル・レーウのばあい——」大正大学大学院論集第十二号 一九八八年 一三三〜一三四頁
- (5) 岸本英夫 『宗教学』大明堂 一九六一年 六頁
- (6) 那須政玄 「理性と宗教（一）——カントの「宗教論」——」『現代密教』第一号 智山伝法院 一九八八年 八三頁
- (7) グスタフ・メンシング 下宮守之訳 『宗教学史』創造社 一九七〇年
- (8) ブライアン・ウィルソン 「千年王国のヴィジョン」『思想』六二二号 一九七六年 二七頁
- (9) 柳川啓一 「世俗化論を超えて」『東洋学術研究』第二十六巻・第一号 一九八七年 三〜四頁
- (10) 柳川啓一 前掲「世俗化論を超えて」 三〜四頁
- (11) トーマス・ルックマン 赤池憲昭、ヤン・スインゲドール訳 『見えない宗教——現代宗教社会学入門——』ヨルダン社 一九七六年
- (12) 田丸徳善 前掲「〈世俗化〉概念の妥当性」 八一頁
中野毅 「世俗化論再考の諸問題」『東洋学術研究』第二十五巻第一号 一九八六年 一〇五〜一〇九頁
- (13) 孝本頁 「都市化・核家族化と現代宗教」『ジュリスト増刊総合特集現代人と宗教』有斐閣 一九八一年 九七頁
- (14) 藤井正雄 「宗教と文化とのかかわり」『宗教1』大正大学出版部 一九八四年 一六頁
- (15) 昭和六十一年度版『宗教年鑑』文化庁編 三七頁
また、昭和六十二年度版の『宗教年鑑』にも、同様のグラフが掲載されており、若干の考察が付け加えられている。
- (16) 宗像巖 「近代化と日本人の宗教価値観の変容——基層宗教文化に対する工業文明の影響を中心として——」『宗教と社会変動』（柳川啓一・安斉伸編）東京大学出版会 一九七九年 三九〜四一頁
- ここでは、近代化の定義として、五種の構造的変化が提示されている。